

第 39 回東京国際映画祭の顔が決定！

【オープニング作品】映画「SUKIYAKI 上を向いて歩こう」

【センターピース】「ゴジラ -0.0」

【クロージング作品】「コロニー」

第 39 回東京国際映画 10 月 26 日（月）～ 11 月 4 日（水）に開催いたします

今年のオープニング作品は、全米 No.1 の歴史的快挙を成し遂げた名曲「上を向いて歩こう」の誕生秘話を描く、世界中を歓喜と涙で包み込む最高の音楽エンターテインメント映画、映画『SUKIYAKI 上を向いて歩こう』。映画祭の中盤を華やかに彩るセンターピースには、第 96 回アカデミー賞® 視覚効果賞受賞を果たし、世界を席巻したゴジラムービーの新たな到達点となる超大作『ゴジラ -0.0』が決定いたしました。そして映画祭のフィナーレを飾るクロージング作品には、『新感染 ファイナル・エクスプレス』（2016）のヨン・サンホ監督が手がける、進化した「集団知性」を持つ感染者との闘いを描いた戦慄のノンストップ・パニック・アクション『コロニー』が決定。ドラマ、特撮、アクションと多彩な表情が揃いました。今年はこの 3 本が映画祭のラインナップを力強く牽引します。

■オープニング作品 映画『SUKIYAKI 上を向いて歩こう』

1963 年。戦後の激動の時代において、全米のビルボードチャートで 3 週連続 No.1 という、日本音楽史に残る偉業を成し遂げた伝説の楽曲「上を向いて歩こう」（英題：SUKIYAKI）。この

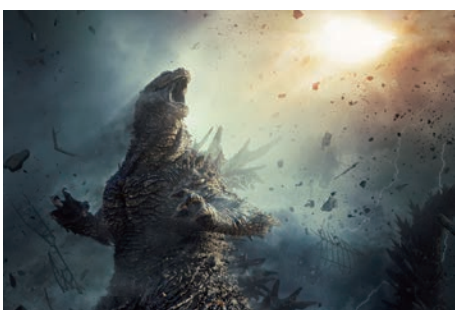


©2026 映画『SUKIYAKI 上を向いて歩こう』製作委員会
楽曲を作り上げた、天才作曲家・中村八大（岡田准一）、作詞家・永六輔（松坂桃李）、歌手・坂本九（仲野太賀）の 3 人の出会い、彼らの情熱と葛藤の日々を描く最高の音楽エンターテインメント映画！

監督：瀬々敬久 脚本：港 岳彦 出演：岡田准一、松坂桃李、仲野太賀 ほか 配給：東宝（2026 年 12 月 25 日（金）公開 / 日本）

■センターピース『ゴジラ -0.0』

戦争によって「無（ゼロ）」になった日本をゴジラが「負（マイナス）」に突き落とした。あれから 2 年。もがき苦しみなながらも復興を遂げ、ようやくたどり着いたはずの日常に、希



©2026 TOHO

望を完全に打ち砕く、新たな絶望の到達点が襲い掛かる。

第 96 回アカデミー賞® 視覚効果賞受賞。世界が熱狂した『ゴジラ -1.0』の、その先へ。三度目はない。ここで、すべて終わらせる。監督・脚本・VFX：山崎 貴 出演：神木隆之介、浜辺美波 ほか 配給：東宝（2026 年 11 月 3 日（火・祝）公開 / 日本）

■クロージング作品『コロニー』

今年のカヌヌ国際映画祭ミッドナйтスクリーニングで上映され、韓国やアジアでも大ヒットを記録した絶体絶命ノンストップ・パニック・アクション！



ソウル都心の超高層 © 2026 SHOWBOX, WOWPOINT AND SMILEGATE. ALL RIGHTS RESERVED.
ビルで突如発生した

未知のバイオテロ。封鎖され逃げ場なきビルに残されたバイオテクノロジー教授であるセジョン（チョン・ジヒョン）らは、猛スピードで襲い来る感染者たちが集団知性を持ち進化し続けることに気づく。

監督・脚本：ヨン・サンホ 出演：チョン・ジヒョン、ク・ギョファン、チ・チャンウク ほか 配給：ギャガ（2027 年公開 / 韓国）

【市山尚三プログラミング・ディレクター コメント】

オープニング作品 映画『SUKIYAKI 上を向いて歩こう』：戦後の日本人を勇気づけた 3 人のアーティストのドラマが名曲の数々とともに綴られる。現在の日本映画界を代表する 3 人の俳優たちによる、この感動的な作品でオープニングを迎えることを嬉しく思います。

センターピース『ゴジラ -0.0』：シリーズ屈指の作品『ゴジラ -1.0』の正当な続編でありつつも、「ゴジラ」についての強烈な新解釈が提示され、期待を遥かに上回る驚きを与えてくれました。この激動の時代に作られるべくして作られた傑作です。

クロージング作品『コロニー』：今年のカヌヌ映画祭の数ある作品の中で最高の興奮と感動を提供してくれた作品です。山のように作られているゾンビ映画というジャンルにはまだまだ未知の可能性があることを実感させてくれました。

<https://app.box.com/s/jsq06gqbhfkwfcj0xceiygp5rk9zakf>

第 39 回東京国際映画祭

呉 美保監督監修によるポスター解禁！ チケット料金を改定、クラファン開始。より楽しめる映画祭へ

今年の TIFF は「CONNECT — 映画が繋ぐ、その先の世界」をテーマに掲げます。今、私たちはかつてない分断の中にいます。政治、経済、文化、宗教、性別など様々なレイヤーで対立が進み、多くの壁が立ちはだかっています。しかし、映画はそんな壁に穴を開けられる存在です。どこかの国の紛争のニュース映像は情報として消費されますが、映画はそれをドラマとして感情に変えることができます。誰かの痛みが自分の痛みになり、誰かの喜びが自分の喜びになる。そして、壁の先の世界と繋がっていくことができます。今年の TIFF では、そんな映画の「繋ぐ力」を信じて、作ることや観ること、伝えることを通して、様々な世界を繋げていきたいと考えています。

今回のポスタービジュアルでは、この「繋ぐ」というテーマを象徴的に表現するため、子供に大人の服を着せて子供と大人を繋ぐ象徴的な存在として、映画が子供と大人の垣根を外すような、楽しいビジュアルを目指しました。見ているだけで心が躍るようなポジティブなビジュアルを通じて、誰もが映画に触れ、新しい世界と繋がっていく高揚感を伝えます。

今回のポスターの監修は、『そのみにて光輝く』（2014）『ぼくが生きてる、ふたつの世界』（2024）などで人間ドラマを瑞々しく描いてきた呉 美保（お・みほ）監督が手掛け、昨年の同監督作の『ふつうの子ども』の主演の嶋田鉄太さんが出演、撮影も同作の田中 創さんが担っています。デザインは昨年に引き続き大島依提亜さんが手掛けています。

【呉 美保監督コメント】

子どもと大人、女と男、仕事と恋愛。私たちは、さまざまな境界を作りながら生きています。けれど本来、それらはきっぱり分けられるものではありません。社会と映画もそう。異なる言語や文化、価値観に触れながら、誰かの痛みや喜びを自分に繋げてきました。この世界から分断や対立が無くならない今こそ、違いを認め合い、ともに生きる希望を持ちたい。暗闇の中、一人スクリーンを見つめながら同じ光を分かち合う。その小さな体験の積み重ねが、私たちの未来を着実に変えていく。「映画に夢をのせて。」そんな思いを『第 39 回東京国際映画祭』のポスターに込めました。

■呉 美保（お・みほ）監督プロフィール

映画監督、CM ディレクター。三重県出身。

大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業後、スクリプターとして映画界入り。初長編脚本『酒井家のしあわせ』でサンダンス・NHK 国際映像作家賞を受賞し、2006 年、同作で長編映画監督デビュー。『オカンの嫁入り』（2010）で新藤兼人賞金賞を受賞。『そのみにて光輝く』（2014）ではモントリオール世界映画祭ワールド・コンペティション部門最優秀監督賞を受賞し、第 87 回米国アカデミー賞国際長編映画賞日本代表作品に選出された。『きみはいい子』（2015）はモスクワ国際映画祭にて最優秀アジア映画賞を受賞。二児の出産を経て、9 年ぶりの長編監督作『ぼくが生きてる、ふたつの世界』（2024）が上海国際映画祭コンペティション部門に選出されるなど、国内外で高い評価を獲得。続く『ふつうの子ども』（2025）はズリーン国際映画祭コンペティション部門に選出され、批評家からも高い評価を受け、世界各地の国際映画祭で上映が続いている。映画のほか、執筆活動や CM、ミュージックビデオの演出も手がけている。

■チケット料金の改定について

TIFF はこれまで世界有数の国際映画祭として世界各国から優れた作品を集めて上映し、映画ファンの皆様に楽しんでいただくとともに、監督やキャストを始めとする映画製作者との交流の場を提供してきました。しかしながら、映画祭を取り巻くコスト環境の変化を鑑み、

今後も映画祭を安定的に運営するため今年度からチケット料金の改定をさせて頂くこととしました。但し、改定は一律の値上げではなく、学生料金については、若い世代がより気軽に映画館で映画に触れ、映画祭に繋がれるよう、一部作品を除き 1,100 円（当日料金 700 円）と例年よりも値下げします。また一般の方々も「TIFF メールマガジン」（登録はコチラ）の会員向けに、映画祭の会期中に限り使用出来る 500 円割引のクーポンを配布するなど、ファンの方々に還元できる仕組みも設けたフレキシブルな料金改定となります。

【新料金体系】

※国立映画アーカイブでの溝口健二特集は別料金となります

■クラウドファンディング開始

昨年は支援金総額「2,546 万円」を記録し、支援額が毎年のように最高値更新をしている「第 39 回東京国際映画祭クラウドファンディング」が本日 12:00pm（正午）よりクラウドファンディングのプラットフォーム「Makuake」にて始まります。（応募期間は 9 月 11 日（金）12:00pm～10 月 9 日（金）22:00pm まで）⇒ Makuake ページはコチラ makuake.com/project/tiff2026/ 開催初日 10 月 26 日（月）の目玉のレッドカーペットイベントは、今年、日比谷開催後初の一部の歩行者コースをリニューアルし、支援者様との接点を増やす予定です。レッドカーペットの鑑賞券をはじめとした、支援者だけが受けられる様々な特典を用意しつつ、支援者の方々が映画祭への支援を通して、映画をより楽しく体験していただく機会になることを望んでいます。なお、本プロジェクトは、寄附型（寄附控除対象）となり、本プロジェクトを通じての寄付は、所得税、住民税などの優遇措置が受けられます。詳しくは TIFF 公式サイト（www.tiff-jp.net）からご確認下さい。

<第 39 回東京国際映画祭 / TIFFCOM 2026 開催概要>

【第 39 回東京国際映画祭】

開催期間：2026 年 10 月 26 日（月）～ 11 月 4 日（水）【10 日間】

■主催：公益財団法人ユニジャパン ◇公式サイト：www.tiff-jp.net

【TIFFCOM 2026】

開催期間：2026 年 10 月 28 日（水）～ 10 月 30 日（金）【3 日間】

■主催：経済産業省、総務省、公益財団法人ユニジャパン

◇公式サイト：tiffcom.jp



ケイト・ブランシェット氏が東京国際映画祭初参加！ ユニクロ支援「ディスプレイメント・フィルム・ファンド」の 日本初上映に伴い来日へ



Photo by Tom Munro

株式会社ユニクロが創設パートナーとして支援する「ディスプレイメント・フィルム・ファンド（Displacement Film Fund / DFF）」によって制作された5本の短編映画の日本初上映（ジャパン・プレミア）に合わせての来日となります。本作の上映と同週、ブランシェット氏は演劇・映像分野における貢献を称えられ、第37回高松宮殿下記念世界文化賞を受賞予定です。

ブランシェット氏は、ロッテルダム国際映画祭のヒューバート・バルス基金と共同でDFFを創設し、率いています。同基金は、避難を余儀なくされた映画制作者、または避難民としての経験を描いた実績のある映画制作者の活動を支援・助成することを目的としています。TIFFは「映画の力で難民の声を世界へ」という同基金の趣旨に賛同し、上映を通じて難民問題への理解と関心を深めるきっかけを創出します。

本作の上映に合わせて、短編作品を手掛けたモハマド・ラスロフ監督（『センス・オブ・ウォーター』）とシャフルバヌ・サダト監督（『スーパー・アフガン・ジム』）が、ブランシェット氏とともに関連イベントへの登壇を予定しています。彼らの対話が、難民問題への理解と共感の輪を日本、そして世界へとさらに広げる大きな契機となることを確信しております

【ケイト・ブランシェット氏コメント】

東京国際映画祭にて、「ディスプレイメント・フィルム・ファンド」の支援を受けて制作された第一弾のショートフィルムを観客の皆さまにお届けできる機会に恵まれ、大変光栄に思います。衝突や迫害によって避難を余儀なくされたり、分断が引き起こされている現代の世界において、映画による物語の力は他者の経験と私たちをつな

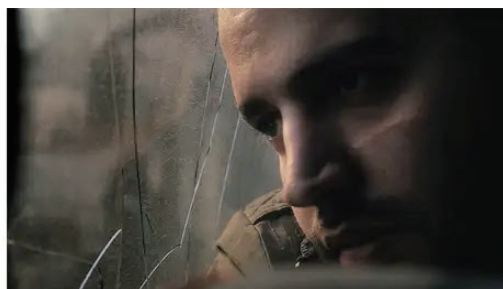
ぐ上で非常に重要な役割を果たします。住処を追われたからといって、映画製作者が創造性を諦めるべきではありません。むしろ、彼らの物語こそが今、よりいっそう切実な響きを持つはずです。

■ディスプレイメント・フィルム・ファンド支援5作品上映スケジュール 10月30日（金）10：40 開場、11：10 上映、上映終了後ゲストによるQ&A（予定）会場：ヒューリックホール東京

■ディスプレイメント・フィルム・ファンド支援5作品

『アライズ・イン・エグザイル / 故郷を追われた盟友たち』
（原題 Allies in Exile）（40分 / イギリス、シリア）

監督：ハサン・カッタン



シリア出身の映画作家、ハサン・カッタンとファディ・アル・アラビは、14年間にわたり紛争と制作の日々を共に過ごし、その時代を象徴する数々の瞬間を記録してきました。現在、彼らはイギリスの難民申請者施設に収容されており、飛び交う爆弾の代わりに、“待機”と“官僚主義”、そして“避難”によって形づくられる新たな日常を記録していきます。

難民への敵意が高まる中で、彼らはカメラを自らの内面へと向け、友情や強制移動の意味を探りながら、未来が見通せない状況において「撮影する」という行為が、生き延びるための手段へと変わっていく過程を映し出しています。

『ローテーション』

（原題 Rotation）（12分 / ウクライナ、トルコ）

監督：マリナ・エル・ゴルバチ



「Rotation」、それは最前線から一時的に離れ、心身の回復を図る期間のことを呼びます。市民生活から兵役へと日常が一変した若いウクライナ女性。これまでとは違う現実についてゆけずに助けを求め、そんな彼女が体験する催眠療法の儀式が描かれています。

『センス・オブ・ウォーター』

(原題 Sense of Water) (39 分 / イラン、ドイツ)

監督：モハマド・ラスロフ



亡命という肌寒い現実の中、イラン人作家は異国の言葉と対峙することを余儀なくされます。再び筆を執るためには、愛や怒り、喜びや悲しみといった感情を、その新しい言語の中であらためて見つけ出さなければなりません。書くことの力を再び手にするため、彼は記憶と忘却、失われた言語と新たな言語の間に往来し、人間であること、感情、そして意味を新たに創造する心の旅路へと向かっていきます。

『スーパー・アフガン・ジム』

(原題 Super Afghan Gym) (14 分 / ドイツ)

監督：シャフルバヌ・サダト



カブール中心部にあるジムでは、一日のうち女性が利用できるたった一時間に、主婦たちが集まります。昼休みに閉ざされた扉の向こうでトレーニングに励みながら、彼女たちは理想の体型や日々の生活について語り合っています。

『ウィスパーズ・オブ・ア・バーニング・セント / 残り香のささやき』

(原題 Whispers of a Burning Scent) (28 分 / ソマリア、オーストリア、ドイツ) 監督：モ・ハラウェ



裁判で重要な審理が行われるその日、結婚式での大切な演奏を控えた寡黙な男は、自身の私生活が衆目にさらされる事態に陥ります。結婚生活を利用していると非難された彼は、裁きや忠誠心、そして胸の奥に秘めた罪悪感の重さを抱えながら、法廷と街、そしてステージのあいだを行き来します。本作は、憤ましくも一度下せば後戻りのできない選択を迫られた男の内面に深く分け入り、献身と尊厳、

そして喪失の狭間で揺れ動く、つかみどころのないその本心を見つめます。

■ディスプレイスメント・フィルム・ファンド (Displacement Film Fund) とは

「ディスプレイスメント・フィルム・ファンド」は、避難を余儀なくされた映画制作者、または避難民としての経験を描いた実績のある映画制作者の活動を支援・助成するために設立されました。2025年の第54回ロッテルダム国際映画祭 (IFFR) において、俳優、プロデューサー、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 親善大使であるケイト・ブランシェット氏が発表し、マスターマインド、ユニクロ、ドローム・エン・ダード、タマーファミリー財団、アマホロ連合が創設パートナーとして名を連ねています。ヒューバート・バルス基金を運営パートナー、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) を戦略パートナーとし、短編映画への助成制度を開始。さらに、第55回ロッテルダム国際映画祭において、新たな主要パートナーとしてアールティ・ロヒア氏および SP ロヒア財団が加わる事が発表されました。

www.uniqlo.com/jp/ja/special-feature/sustainability/displacement-film-fund

■ケイト・ブランシェット氏プロフィール

ケイト・ブランシェットはその女優キャリアを通じて、ウェス・アンダーソン、ジリアン・アームストロング、ブルース・ベレスフォード、アルフォンソ・キュアロン、トッド・フィールド、デヴィッド・フィンチャー、ジム・ジャームッシュ、アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥ、トッド・ヘインズ、ピーター・ジャクソン、シェカール・カプール、マーティン・スコセッシ、スティーヴン・ソダーバーグ、ギレルモ・デル・トロ、スティーヴン・スピルバーグなど、名だたる映画監督の作品に出演。近作では、アリス・バーチ監督の『Sweetsick』の撮影を終え、現在ジャンクサ・ブラヴォー監督作で、マーサ・スチュワートの半生を描いた作品に取り組んでいる。数々の受賞歴には、2 度のアカデミー賞、4 度の英国アカデミー賞 (BAFTA) とゴールデン・グローブ賞、3 度の SAG 賞 (第 32 回から「アクター賞」に改称) など。さらにカンヌ、カメリマージュ、ヴェネチア国際映画祭で審査委員長を務めており、2 度のヴォルピ杯 (ヴェネチア映画祭女優賞)、BFI フェロウシップ、名誉セザール賞、ドノスティア賞、ゴヤ賞など数々の国際的な栄誉に輝いている。

同氏は、アンドリュー・アップトン、ココ・フランシーニと共に「Dirty Films」を共同設立。避難を余儀なくされた映画制作者、または避難民としての経験を描いた実績のある映画制作者の活動を支援・助成する「ディスプレイスメント・フィルム・ファンド」の創設をはじめ、女性、トランスジェンダー、ノンバイナリーの声を広める映画制作者を支援する Proof of Concept の共同リーダーを務めている。さらに AI から創作物や個人のアイデンティティを守ることを目的とした非営利団体「RSL Media」を設立。UNHCR 親善大使、アースショット賞評議委員として、環境、芸術、人権団体を積極的に支援している。第 82 回ヴェネチア国際映画祭で金獅子賞に輝いた最新作『ファーザー・マザー・シスター・ブラザー』(2025 年) は、11 月 20 日より劇場公開予定。